顏之推の生活と文學觀

林田慎之助

序章

顏之推が著した「顏氏家訓」は魏晉以來、數多くあらわれてきた家訓の体裁をとるにもかかわらず、その內容に至っては、時間の經過に色褪せることのない人生のふかい智慧と確かな洞察にみちている。[1] そしてそれは著者自身の體驗してきた苛酷な運命と過重な生活に磨滅することなく、あくまで眞實の側に生きることを教えるすぐれた隨想文學として、また南北朝時代の文化、風俗を傳達するのに價値ある記錄として、中國文學史上異彩を放つ性格の書である。すなわち欽定四庫全書總目提要は「顏氏家訓」を雜家類一に組入れ、それを解說して「晁公武讀書志に言う。之推もと梁の人。著すところ凡そ二十篇。立身治家の法を述べ、時俗の謬を辨正し、以て世人を訓うと。今其の書を觀るに、大抵世故人情に於て深く利害を明かにし、而して能く之を文るに經訓を以てす。故に唐志、宋志倶に之を儒家に列す。然るにその中歸心等の篇、因果を深明にし當時の好佛の習いを出でず。又兼ねるに字畫・音訓を論じ竝びに典故を考正し、文藝を品第し、曼衍旁涉、專ら一家の言を爲さず」と誌るし、その多彩な性格に注目している。

顏之推は梁朝の滅亡後、南北に亂立せる諸王朝がたがいに拮抗し、他國の貪食に餘念のない動亂のなかに身を處して、西魏、北齊、北周をへて、隋の開皇年間まで各朝を轉々としながら生きぬいた、たくましい生活者であった。この不安定な生存の條件下にあって、めまぐるしく變貌し、交錯する時代のさまざまな人間の生活と文化の生態のなかから汲みとられた貪婪で、多面的な生活者の文學所產であるところに、「顏氏家訓」の持續する生命があるといえる。

いま顏之推の著作活動についてみてみると、隋書經籍志には、「訓俗文字略」一卷、「證俗音字略」六卷、「集靈記」二十卷、「寃魂記」三卷、「七悟」一卷、さらに清の張鵬一の節錄になる隋書經籍志補には「顏黃門集」三十卷、「續文章流別」をとどめているが、これに「家訓」の二十篇を加えると、文字、音韻、說話、哀弔、詩賦、評論、隨筆の各分野にわたっており、顏之推がいかに博學で多彩な才能の持主であったか容易に想像することができる。この小論は四庫全書總目提要で紀昀の言う「文藝の品第」を主な對象として、之推の文學觀を考察するものである。これを對象とする限り、家訓、說話の類を除き、ほとんど散佚してしまった前掲の書目のなかで、ことに「續文章流別」という書物の性格が注意をひく。これはおそらく晉の摯虞の

「文章流別集」の体裁を踏襲するもので、文体、ジャンルの流別區分に撰者の獨自な文學的見識が働いていたとみるのはあながち不當な見方ではないであろう。摯虞の場合、現在藝文類聚、太平御覽にその斷片をとどめる「文章流別論」という晉代の文學思潮とかかわりをもつ具体的な文體論の構想がまずあって、「文章流別集」が編撰されたと推定するのが常識である。この事情からすれば、顏之推が「家訓」文章篇・勉學篇で示したところの當時の詩文に關する批判と、彼なりの文體改革論の提起を考えあわせるとき、「續文章流別」の編撰にあたって、顏之推のなかでは、すでに精密で獨自な文體論の構想が靑寫眞としてできあがっていたと考えることができる。かかる推論に立てば、中國文學史上に、文學史家として、批評家として一個の獨立した重要な地位を顏之推にあたえねばならぬことは當然であろう。

さて、顏之推の文學觀を考察するまえに、便宜上、彼の生活についての素描をこころみたい。なぜなら、「吾亂世に生れ、戎馬に長じ、流離播越す」（家訓・慕賢篇）とか、「吾年十九にして、梁家の喪亂に値い、其の間、白刃と伍を爲す者、亦常に數輩」（家訓・終制篇）の記述は亂世に生を亨けた自己の生涯を流離放浪の生活だと觀じるものが、幾度となく生命の危機にさらされてきた自己の生活者としてのきびしい相貌を、簡潔にあますところなく傳えるものであり、それが「顏氏家訓」の著述の總體をささえるちからである以上、顏之推の思想と文學が、このような彼自身の切實な生活體驗との對決からでてきたものであることはあきらかである。

一

顏之推の生活を檢討する資料としては、北齊書顏之推傳、淸の趙曦明の註本「顏氏家訓」（抱經堂叢書）、之推が自己の生涯を賦に織込んだ「觀我生賦」（全隋文）と、殘存する詩五首（全北齊詩）をあげることができる。その他、北齊書崔季舒傳、同書祖珽傳及び、梁書顏見遠傳、梁書顏協傳を參考にあげればほぼその全貌はつくされたことになる。ここであえて誤解をおそれずにいえば、つねに傳記的資料の中からうかがうことのできる或る一人の人間がその時おりの現實に處した行動の軌跡は、彼自身の著作に表現された文字をたどる以上に、意外に生々しい思想の裂け目をみせており、とくに「家訓」という多分にたてまえ的な體裁をもつ著述をおこなった顏之推の思想と人間を、いくらかでも正確に汲みあげようとするためには、この傳記的資料と著述表現の間にある落差と龜裂に、或る種の有効性を認めないわけにはゆかないし、そこに資料をあつかう論者の取捨撰擇を必要とする理由がある。

いうまでもなく、この小論のなかで、彼の生涯について詳細にのべることは不可能にちかい。したがって一層精密に傳記的資料を檢討し取捨選擇することがここで必要になってくるわけだが、まず顏氏の家系に占める之推の生活的環境と彼が受繼いだ精神的血統、第二に梁朝における之推、とくに湘東王繹（元帝）との精神的交渉、それから北方流離以後の異民族支配下に於ける之推の行動生態の三点をとりあげ、再構成をおこなうなかで、複雜な顏之推の人間像にできうるかぎり接近してみることにする。

顏氏は山東琅邪の豪族で、晉の南渡に從って江陵に移住したものである。西晉時代、顏氏七代の顏含が尨大な莊園を所有する山東豪族の經濟的基礎の上に、中央權力の座で侍中光錄西平侯の顯職に列っていた當時の顏氏の實質的な權威と經濟力は山東の名家顏氏の血統家柄と

は別に、南方移住後その地に自己の經濟力を移植擴充することができないまま、急速に沒落していったと考えられる。梁書顏見遠傳、同書顏協傳の記述にみえるかぎり、顏之推にとって祖父、父にあたるこの兩者の江陵に於ける地位は微々たるものにすぎなかったことがその證據である。たとえば、顏見遠は齊の和帝にその博學をかわれて、治書侍御史兼中丞にあげられているが、北方顏氏の家柄から考えて微祿の官にすぎないのに、齊室と梁室の權力交替期に、齊室の恩義に感じて發憤飢死した見遠の生活境遇は、さらに殘された顏協が幼くして母方の里にひきとられて養育されねばならなかった事實によって裏書きされている。顏協は後に梁の湘東王繹に仕え國常侍兼記室の官位にあって、江陵の藩府では顧協と文才を競い二協とたたえられていたが、大同五年四十二歳で卒している。その間、建康の梁室の招徵をうけたが、「家門の事義に感じ」、つまり顏見遠の梁室に對する死の抗議にこだわり、江陵藩府にとどまったと顏協傳はつたえている。梁室に對してとった見遠、協二代の志操を貫く行爲に顯在化されているような顏氏の精神的血統は顏之推の文學觀を考える場合、見逃せない資料を提供するものであるが、此處ではもっぱら顏氏の江陵における不安定な經濟的地盤に論述の力點をおきたい。これを端的にしかも如實に物語るのは、顏協の死が殘した顏家の窮乏狀態をつげる次の記錄である。

「年始めて九歲、便ち荼蓼に丁り、家塗離散し、百口索然たり」（家訓・序致篇）と之推がのべる痛ましい顏家離散の樣子は莊園經濟のうえにがっしり根をおろしていた北方の豪族顏氏も江南移住後、より正確にいえば齊梁の間においては土地なき俸祿者の生活にあまんじなければならなかった沒落の事情を告げるものである。之推が十二歲になると、湘東王繹の門徒として江陵藩府に預けられたのもこのような家庭の事情によるものと考えてよい。

湘東王繹は後の梁の元帝であるが、當時一つの風潮であった清談を好み、老莊の研究に沒頭し、みずから玄學の形而上學的思辯の講釋をおこなっている。門徒の顏之推は當然この講釋を末席で拜聽しなければならなかった。だが元來、虛談は彼の性格とあいいれず、そのため門徒を辭退して家に歸り、その後、彼は顏氏の家學である周禮、春秋左氏傳を耽讀している。このことは顏氏の家系に流れる操行とともに、彼の文學觀の形成過程をとく一つのてがかりをあたえるもので、のちほど再考することにして、この頃から既に文章をあらわし、異常に文學的才能をみせた顏之推の所謂青春期に相當する十代の後半にいま暫く照明をあてることにする。

「慈兄の鞠育苦辛備に至り、仁有りて威無く導示切ならず。禮傳を讀み微文を屬するを愛すと雖も、頗る凡人の陶染する所と爲り、欲を肆にし言を輕んじ、邊幅を備えず。十九にして少しく砥礪を知るも、習いは自然の若くにして卒に洗盪し難し。」（家訓・序致篇）と回想しているが、このことはその十代の後半までなお老莊的生活氣風が彼の日常生活における習慣として浸透し、持續していたことを告げるものである。ここで顏之推は自己の經驗の記憶をたどり、習慣の根强い反復性について反省しているわけだが、家訓という著述の性格上、倫理的な說得にどうしても論點がひきずられてゆく傾斜をもっており、そのため記述に事實そのままの正確さを欠く憾みがあることを斟酌すれば、慈兄の鞠育にあまえた習慣のせいだけでなく、この「肆欲輕言、不備邊幅」の振舞いはすでに十代の半ばに高い世評をかちえた非凡な文才にたいする彼自身の自負からでたものではなかったか。

「群籍を博覽し、該洽ならざる無し。詞情典麗甚だ西府の稱する所

と爲る。繹以て國右常侍と爲し鎭西墨曹參軍に加ふ」という北齊書顏之推傳の記錄は、彼が一旦門徒を辭退した湘東王から、再び詞情典麗な文才をかわれて招かれ、官位を授かったことを傳えるものであるが、この記錄からだけでも得意な彼の姿を想像することは容易である。いま更にそのことを裏書きするものに「古意二首」と題する五言詩がのこっている。

十五好詩書　十五詩書を好み
二十彈冠仕　二十彈冠して仕う
楚王賜顏色　楚王顏色を賜い
出入章華裏　章華の裏に出入す
作賦凌屈原　賦を作りては屈原を凌ぎ
讀書誇左史　書を讀みては左史に誇る
數從明月讌　しばしば明月の讌に從い
或侍朝雲祀　或は朝雲の祀に侍る
登山摘紫芝　山に登り紫芝を摘み
泛江採綠芷　江に泛びて綠芷を採る

（北齊詩所收）

この詩句の制作年代は不明であるが、若き日の自我像への鄕愁が主調音となっていることからすれば、おそらく晩年の作と考えられる。實際に當時の之推は賦詩においては屈原を、讀書においては左史を凌ぐ才能を持っているという青年らしい覇氣と傲岸な自負にささえられていたとみえる。ただ「二十彈冠仕」の詩句は「觀我生賦」の自注に從うと履歷の事實にもとっており、正確には彼の仕官は歲十九のときである。この頃すでに「金樓子」を著し、文學者として當代一流の才子と仰がれていた湘東王繹が、顏之推の文才を賞でて目をかけたのは當然である。しかし、この得意の時代は外からきわめて早い速度で瓦解しなければならぬ運命にあった。すでに建康の梁室は東魏の降將侯景の謀逆にあい、崩壞寸前の狀態におかれていたからである。

二

ここに章を改めて顏之推と湘東王（元帝）との精神的交涉、嚴密にいえば單なる君臣主從の關係をこえる親近性にふれることにする。これは晉安王時代から簡文帝と徐摛、徐陵（或は庾肩吾・庾信）との間にみられる精神的親近性が、簡文帝を頂點とする文學集團の形成の中で、父子二代にわたって培養されたという同じ狀況が、湘東王と顏之推の關係にも想定される。つまり、湘東王を中心として江陵藩府に構成された文學集團に、之推がその文才を認められて弱冠にみたずして參加したというだけでなく、湘東王と父顏協の文學的交涉がすでにその間に介在している事實が一層二人の親近性を濃厚なものにしたと言えるからである。

さて、顏之推の生涯を左右する事件を調べてゆくうちに、元帝の存在がつねに微妙な作用をひきおこしていることに氣附く。いささかの誇張をおそれずにいえば、顏之推の思想の方向を決定する內面的な要因を考えるとき、二人の間の交涉に永續性をもたらすことになる悲慘な元帝の死は、つねに之推にながれる父祖の精神的血統がそうであるように潛在化し、その要因の重要な基底部分を構成しているかにみうけられる。いま元帝の視點から顏之推の精神史を檢證する操作は充分な意義をもつと考えられるが、そのまえに第一章からひきつぎ侯景の亂にもどることにする。

顏之推十九歲（A・D五四九年）の五月には、侯景の率いる精銳な騎

兵は建康を襲い武帝を捕え獄中で餓死せしめる。その後之推が守備にあたっていた郢州の鎭も陷落、この時捕虜となった彼は侯景の殺意にもかかわらず、其の行臺郎中王則のとりなしで偶然にも死に曝らされていた一命を拾う。かくて死をまぬがれた彼は、ただちに建康城内の獄舍におくられているが、このときの心情を「觀我生賦」（全隋文・北齊書）のなかで、「犇虜其の餘毒を快にし、縲囚野草に膏す。幸に先主の勸め無く、滕公の我を保ずるに賴り、鬼錄を岱宗より剉り、歸魂を蒼昊より招く。性命の重賜を荷ひ、若き人（王則）に銜くるに老を終ふるを以てす」とのべ、劉備（先主）が曹操にすすめて呂布を殺す故事および夏侯嬰（滕公）が韓信の一命をたすける故事をふまえて、死を目前にして死を脱した自分の運命に喩えている。たしかに、「剉鬼錄於岱宗、招歸魂於蒼昊、荷性命之重賜、銜若人以終老」という言葉は捕囚刑死の道をすでに踏みだしていた顏之推にとって、そのときのいつわらざる感謝の心をつたえる肉聲であったと考えられる。死の恐怖にさらされ、死をまぬがれた虛脱感のうちに之推を襲ったものは、ふかい再生の喜悅であったにちがいない。この偶然に支配される運命が、彼にあたえた衝擊は、後年彼を佛敎に歸依させる直接的導因となっている。

その後、湘東王は王僧辨、陳覇先の軍に擁護されて、簡文帝を弑し漢皇帝を僭號せる侯景を建康に討ち、あらためて梁室三代の皇位を繼承、元帝と稱する。ときに獄中から釋放された之推は散騎侍郎に任ぜられている。元帝は荒廢した都、建康をすて、A・D五五二年江陵を都と定めた。ところが江陵の地は西魏にちかかったため、いまだ治政の大綱を整備されない承聖三年冬十一月（A・D五五四年）西魏の宰相宇文泰麾下の騎兵の襲うところとなり、一擧に潰滅。元帝は落城を目前にして、苦心して集めた書物四萬卷を燒き、讀書萬卷、何の役にも立たぬと嘆じ、西魏に降って殺されている。「觀我生賦」には、この江陵敗北の悲痛史をまのあたりで經驗した目で、「民百萬、囚虜となり、書千兩煙煬す、溥天の下斯の民盡く喪ぶ。嬰孺何の辜あるかと憐み、老疾の狀無きを矜む。諸を懷より奪ひて艸に棄て、塗に踣れては掠を受く。乘輿の殘酷を冤み、人神の無狀を軫む。下車に乘せて以て黜喪し、桐棺を揜いて藁葬す。雲無心にして以て容與たり、風憤りを懷いて憀恨たり」と寫しているが、この殘酷悽慘な情景は生涯顏之推の眼底から離れることはなかったのである。そして、奴隷として長安におくられる江陵の民十數萬のなかには、二十四歲の之推も妻子とともに西魏の虜囚としてまじっている。前掲の「古意二首」は、梁の元帝を追哀することを主題とするものであるが、そのなかで、この江陵敗北の日に梁室に殉死せず、おめおめと生きながらえた自分を恥じてうたう一節がある。

未獲殉陵墓　未だ陵墓に殉ずるを獲ず
獨生良足恥　獨り生きて良に恥ずるに足る
憫憫思舊鄉　憫憫として舊鄉を思い
惻惻懷君子　惻惻として君子を懷う
白髮窺明鏡　白髮明鏡を窺い
憂傷沒餘齒　憂傷して餘齒を沒せん

梁室は滅亡し、自分を愛し自分が尊敬した主君は殺されたが、之推は死んでいない。現に異朝の臣として生きのびている。「獨り生きて良に恥ずるに足る」とは、生きることがそのまま恥辱であることを意味する。この恥辱は憂傷となって死ぬまでつづくであろうという意味をこの詩はこめている。しかし、何故この恥辱を抱いてまで彼は生き

ねばならなかったのか。詳しくはそれについて之推は觸れていない。ただ「觀我生賦」に「留釧の妻、人其の斷絶を銜み、擊磬の子、家其の悲愴纒る。小臣其の獨り死すことを恥じ、實に胡顏に媿ずる有り。痾疾を牽きて路に就き、駑蹇を策って關に入る」という一節があり、この問題をとく一つのてがかりをあたえる。「家纒其悲愴、小臣恥其獨死」とあるからには、主從關係におけるたてまえとしての忠の倫理をつらぬくことで、彼は家族を路傍に迷わせる無責任をのがれることはできなかったのである。おそらく傳えきいた事件であったにしろ、かって梁の武帝が齊の一族を虐殺し、帝位を簒奪したことから齊室に殉じた祖父、顏見遠（梁書列傳四十四）の發憤飢死と、あとにのこされた父の苦勞、父の早世が招いた一家離散の憂き目を、之推は殉死すべきか否かの際に思いかえしたのであろう。祖父は發憤飢死の方法をえらぶことで「忠の倫理」を貫徹した。にもかかわらず、このたてまえの裏に強いられるものは、殘された肉親の悲劇であるという事實から彼は目を敝うことができなかった。だから之推は「胡顏に媿ずる有る」の道をえらび、駑馬のように沈む重い足どりに、みずから鞭をあて、脚氣にむくんだ足をひきずりながらも虜囚となってひたすら生きようとしたのである。

三

顏之推が虜囚となって北方に流離して以後、異民族の支配下における漢民族の一官僚として生きねばならなかった彼の行動の軌跡はいきおい、きわめて複雜な軌跡をえがくことになる。ひたすら生きぬくという理念にささえられていたかにみえる之推の姿勢に、中國の傳統的家族制度からでてくる一般的通念である顏氏という家名の存續と、そのための家長としての責任感がその理念の中核となっていることを指摘できる。それは彼自身「顏氏家訓」にあって繰返し陳述する主要な問題であり、彈力性に富んだ彼の合理主義的思考法が生みだした從來の保守的な家族制度から一歩前進した新しい家族型態を考え、そのなかでの家族を構成する各人がそれぞれの位置で確立せねばならぬ責任の倫理という理念に歸着するからである。[8] しかし、このような彼の姿勢が、たとえ唯單に保身家の處世主義と映ることはあっても、異民族の官僚組織に否應なく組み入れられる狀況下にあつて、生きぬくことがそのまま絶えざる自己との覺たる格鬪である以上、さらにそのような生き方をとおして自己の哲學を創造しようとする不逞なるリアリストの魂膽を、そこに讀めないでもない。

とにかく、顏之推が西魏を脱出したのは二十五歳（A・D五五八年）のときで、北周（西魏）を出て北齊を經由し南にぬけ、梁室再建に參加するための死を賭した逃亡計畫の實行であった。彼は黃河の氾濫に乘じて一隻の小舟に妻子をのせ、濁流渦卷く河にのり入れ、激流としておそれられていた砥柱の險を大膽にものりきって、ついに北齊の地にたどりついている。この脱出行をうたった「從周入齊夜度砥柱」（全北齊詩所收）と題する詩に、

俠客重艱辛　俠客艱辛を重ね
夜出小平津　夜小平津を出ず
馬色迷關吏　馬色關吏を迷はせ
鷄鳴起戍人　鷄鳴戍人を起す
露鮮華劒彩　露鮮かにして華劒彩あり
月照寶刀新　月照りて寶刀新たなり
問我將何去　我に問ふ將に何に去らんとすと

北海就孫賓　北海孫賓に就く

とあり、夜の沈默にこもる緊迫感、死を賭する脱出の危機感が鮮かに描かれているが、この脱出をきいて「時人其の勇決を稱ふ」と北齊書顏之推傳はつたえる。

北齊の都・鄴で、すでに梁室再建にあたった敬帝が陳覇先に禪讓し、あらたに陳の國が出現したことをきき及んだ之推は、南に還る事を斷念、北齊の文宣帝にまみえ、以後北齊の臣となる。西魏においても、それから北齊の朝廷にあっても、顏之推が重用されている事實の裏には、優秀な中國文化の傳統を維持し發展させるに力あった顏延之、顏協など著名な文學者を輩出させたところの顏氏の名が、漢民族の支配者として漢文化を吸收することにおわれていた北方異族の朝廷の間にあってつとにきこえ、そのような名家豪族を珍重し受け容れる態勢がすでにあったことをものがたっている。とくに梁と友好的な外交關係に立つていた北齊の朝廷に、江陵における顏之推個人の文名がすでに傳えられていたという想定に立てば、突然伺候した顏之推をみて、文宣帝が非常に喜び彼を珍重し、その厚い信任がさらに武成帝にひきつがれ、それに彼の才能がこたえるにつれ、官位も奉朝請、中書舍人、趙州功參軍、黃門侍郎と累進していった事情もほぼうなづかれるであろう。

武成帝の後を嗣いだ齊王後主溫公は頗る文學を好み、時の左僕射祖珽の進言をとり、「文林館」を設置して、多數の文學者を招き、修文殿御覽の撰にあたらせたが、顏之推もこれに加えられている。「資治通鑑」十卷陳紀五によれば、中書侍郎の李德林らとともに文林館待詔になったのは、武平四年四月で之推四十七歲の時である。當時の彼は「聰穎機悟、博識才辨有り。尺牘に工にして、應對閑明」といわれ、その才能を北齊の宮廷に鳴らし、とくに左僕射祖珽に重んじられていた。

このころ北齊は、外では陳と交戰中であり、內では大將軍韓張鸞が政治の實權をにぎり、徒黨私欲の腐敗政治を行っていたので、左僕射祖珽は司徒の趙彥信、僕射の段孝言、侍中の崔季舒、國子祭酒の張雕武とともに內政刷新にのりだし、韓、祖の兩派の主權抗爭は頂點に達していた。顏之推は祖珽に重用せられているのだから、この改革派にちかい立場にいたはずである。武平四年のなかば、まず韓張鸞は祖珽を讒言して北徐州刺史に退け、さらに祖一派の勢力を一掃する機會をうかがっていたが、改革派は同年十二月におこった晉陽御幸諫止事件に乘ぜられ、完全に失脚する。すこしくこの事件を北齊書列傳三十九に收める崔季舒傳及び祖珽傳からみてみよう。十二月、帝が晉陽に御幸されるときいた崔季舒、張雕武らは、晉陽へ御幸する車駕を民衆がみれば、陳の南寇をおそれて、爲政者が避難しはじめたのだと誤解し、人心に動搖をきたす、という見解にたち、駕にしたがう文官とともに名をつらねて諫止する。諫止直前に段孝言、趙彥信らの飜心があつたことを知つた韓張鸞は、この機をのがさず漢兒の文官が御幸を諫止するのは謀叛の徵候であり、すぐ誅殺すべきだと進言したので、鮮卑族出の皇帝は色をなし、ただちに各署の官吏を含章殿に集めてきびしくとりしらべた結果、崔季舒・張雕武・封孝琰・唐邕と詩人の劉逖が漢兒謀叛の首魁とみなされ、卽刻殿庭で斬首されている。このとき顏之推も、祖珽派にちかい存在であったため召喚されて取調べをうけたが、肝心の諫止連署名簿に彼の名がみあたらず、證據不充分で危うく難をまぬがれている。しかしこの諫止事件の際、顏之推のとった態度を傳える北齊書顏之推傳の記述は頗る微妙複雜である。「崔季舒等將

に諫めんとするや、之推急を取り宅に還る。故に連署せず。諫人を召集するにおよんで、之推亦喚せられて、勘に入るも、其の名無くして罪を免ぬがるるを得」と。この之推の行動は、あきらかに保身の術から出たものであるが、ただ機をみるに敏な卑劣漢の振舞いといえるほど單純な動機に發足しているのであろうか。動機といえば、かって梁朝滅亡のさい殉死せずに捕囚となって、家族と一緒に長安までのながい道程をあしなえた駑馬のようなみじめな姿をさらしながら、ひたすら生きようとした執念のほむらと同質のものが感じられる。いまは顏之推が「顏氏家訓」の終制篇のなかで、身を刻む恥辱をいだいて生きてきた自己の論理を骨肉にむかって切々と書きしるした次の言葉に托する心情以上にこの彼の屈折した行動にたいして眞實味のある解答を求めることはできない。「自ら咎め自ら責めて心に貫き髓に刻む。計るに吾が兄弟當に仕進するべからず。但だ門衰へ骨肉單弱にして、五服の內傍らに一人も無く、他鄕に播越して、復資廕無く、汝等をして斷役に沈淪せしめば、以て先世の恥と爲すを以て、故に人間に覥冒し敢て墜失せず」恐らく之推のとった行動はこの動機以上にでないであろう。言いかえるならば、北齊の宮廷內部における權力抗爭にこの諫止事件がからんでいること、およびそれがひきおこす事態をすばやく見拔いて、本能的に骨肉の悲劇にかかわる危機を豫感した結果である。顏之推にとって君臣の絆を感じ、その間に介在する臣の倫理にそむいて生きている自分を咎め責めねばならぬ主君は梁の元帝にほかならず、いまはもはや、それすら追哀と憂傷をふかめるばかりの存在であり、それ自体、顏之推の心の廢墟であった。察するにこの彼にとって、異朝における權力抗爭は、なんの關心をもよびおこさなかったにちがいない。異民族の支配体制のなかで技術的な事務處理において、適宜有能な一漢族の官吏として存在する以外に、その他のことに關心を示さず、ひたすら屈折した論理をもちいながら生きぬいてゆく道しか彼にはのこされていなかったのである。

北齊にあって、顏之推が黃門侍郎に任ぜられてまもなく、この國の民意が殺伐狂暴な王室から離れているのをみた北周の武帝は、兵を用いてこれを併呑する。ついで北周の宰相楊堅は靜帝に禪讓をせまり、都を長安に定め國號を隋と稱したのがA・D五一八年、之推五十一歲のときである。隋の開皇年間あらためて彼は太子に召されて學士となり、禮重き待遇をうけるが、同十一年（A・D五九一年）六十一歲の生涯を靜かに閉じている。

予一生而三化　予一たび生れて三たび化し
備荼苦而蓼辛　備さに荼苦して蓼辛す
鳥焚林而鎩翮　鳥林を焚かれて翮を鎩ぎ
魚奪水而暴鱗　魚、水を奪はれて鱗をさらす
嗟宇宙之遼曠　嗟、宇宙の遼曠たる
愧無所而容身　所として身容るるなきを愧ず

「觀我生賦」[8]にみられるこの一節にふさわしい彷徨者のきびしい悲哀こそ、波瀾にとんだ生活者、顏之推の生涯をつうじて形成されたものであった。

四

顏之推の文學觀は中國文學批評史の上では、北朝文學論の系譜のなかに位置づけられている。たとえば、郭紹虞氏は「顏之推の論調は、南朝のような批評態度とちがっている。顏氏の著したものに顏氏家訓があり、その文學觀念は全く文章篇一篇のなかにあり、その主旨を論

じると頗る劉勰の文心雕龍の復古的な主張にちかい。（中略）王褒、庾信は南から北に入って作風は一變している。そのように顏之推の批評主張も、大なり小なり多分に北朝の影響がある」（中國文學批評史P 91）とのべ、羅根澤氏も「顏氏家訓」文章篇にみえる文人輕薄論、文德論について「顏之推と楊遵彥は、おなじく北朝にいでており、このような論調も北朝の特產であることがわかる」とのべ、文心雕龍程器篇で文人の行爲を庇護する立場をとる劉勰の南朝文學論と對照的にはっきりした北朝の特徵を帶びていると論じている。（中國文學批評史(一)P 255）

ここで北朝の影響、北朝の特產といわれるものは、嚴密な意味で北方の風土、氣候、風俗、習性の支配がもたらす總和のなかに特徵的にあらわれてくる處生觀、生活觀を指しており、行動性を尙び、質實敦朴を旨とする生活信條につながる現實主義的、功利主義的、倫理的傾向を帶びた文學思想の一般的性格である。

顏之推が家訓文章篇を中核として勉學篇、雜藝篇、音辭篇で展開する非体系的な文學論は、北方風の道德的リゴリズムに支配され、六朝時代急速に發展してきた精緻な修辭學の否定に立った素朴リアリズムの北朝文學論とある點では同質の、ある點では異質の批評原理にたつものである。所謂、北朝文學論の系譜に位置づける論者がいづれも、なお顏之推を折中的（郭紹虞氏）溫和な（羅根澤氏）中庸（鈴木虎雄氏）論的文學觀にたつ者とよぶ所以もここにある。言いかえるならば、散見する他の北朝文學論のなかでは、美意識の次元ではもっとも解放的な文學論の展開をみせているといえる。このことは、顏之推が庾信とおなじく南から北に入った文學者であり、青年時代のみずみずしい彼の感受性がうけとめた、北朝の文風とまったく異質の、南朝梁代の文學的還境、およびその影響におうところが大きい。

端的に梁代の文學の性格を規定するとすれば、宮廷とそこに參加する豪族貴族によって形成される宮廷サロン文學である。魏末晉初において文學の旗手が、貴族＝官僚に完全移行をとげて以來、兩晉、宋、齊をへて繁縟華美を求める貴族文學の場であった宮廷サロンの性格は、梁代に至って爛熟期を迎える。李延壽の「南史」文苑傳序は「中原沸騰し、五馬南渡してより、綴文の士時に乏しきこと無し。降りて梁朝に及び、其の流れ弥盛んなり。蓋し時主儒雅にして篤く文章を好む。故に才秀の士、煥乎として俱に集る。時に武帝毎に臨幸する所、輒ち羣臣に命じて詩を賦せしむ。其の文の善き者は賜ふに金帛を以てす。是を以て縉紳の士咸自ら勵むを知る」と誌し、梁代文學の隆盛は、梁の武帝（蕭衍）の振興にもとづくものとみている。武帝は齊の永明年間竟陵王の幕下にあって、竟陵の八友と稱され謝眺、任昉、沈約、陸倕、范雲、蕭琛、王融とともに清新巧緻な詩賦をのこしており、その後天下を掌握するに至って、自ら梁朝文學の要の役割を演じたのは自然である。

この武帝をはじめ、その三子、昭明太子（蕭統）簡文帝（蕭綱）元帝（蕭繹）はいずれも文學を愛好し、みずから詩文にきわだった才能をみせ、各々の幕下に著名な文學者をあつめ、文風の奬勵保護につとめており、つねに魏の三祖（曹操、曹丕、曹植）と比較される。「梁書」本紀昭明太子の傳をみると、「性は寬和にして衆を容れ、喜慍色に形さず、才學の士を引納し、賞愛倦むことなし。恒に篇籍を討論し、或は學士と古今を商榷す。閒あらば則ち繼ぐに文章著述を以てし、率ね以て常と爲す。時に東宮において書幾んど三萬卷有り。名才並び集り、文學の盛んなること、晉宋以來未だ之れ有らず」の記錄があり、陸倕、劉孝綽など著名な文學者が東宮の下にいて、その賞愛をう

け、典籍學問にかんする集團討論を熱心におこなうなかで、晉宋以來の文學黃金時代をまねいたという記述は、かならずしも誇張した表現ではない。

しかし、梁代の宮廷サロン文學の性格は、優艶閨情を主な內容とする「宮體」詩の提唱、その集大成である「玉臺新詠」の編纂、それをささえる簡文帝（太宗）を中核とする文學集團において具體的な表現をみる。すなわち、「初め太宗藩に在り、雅に文章の士を好む。時に肩吾は東海の徐摛、吳郡の陸杲、彭城の劉遵劉孝儀、弟の孝威とともに同じく賞接せらる。東宮に居るに及び又文德省を開き學士を置く。肩吾の子信、摛の子陵、吳郡の張長公、北地の傅弘、東海の鮑至等其の選に充てらる。齊の永明中の文士王融、謝朓、沈約、文章に始めて四聲を用い以て新變をなす。是に至って轉聲韻に拘り、彌麗靡を尙ぶこと復往時を踰ゆ」とつたえる「梁書」列傳四十三庾肩吾傳がそれである。ただこの期の代表的な詩人、徐陵、庾信の詩は齊の永明年間すでに王融、謝朓、沈約らが整備完成した音聲修辭學の細密な技巧を踏襲するものであり、さらに深く詩の形式美をその樣々な技巧と意匠において實驗追求しているが、それとは逆に詠物、閑情、閨情を主題とする詩の內容は空疏にはしり、完全に貴族的趣味と玩賞の對象に墮する。そのため「王元長其の首を創め、謝朓、沈約その波を揚ぐ。三賢は咸貴公の子孫にして文辯有り。是に於て士流景慕し、精密を爲し襲積細微專ら相凌架す。故に文をして拘忌多く、其の眞美を傷はしむ」（詩品、下品序）と、同時代の詩論家鍾嶸をして嘆かせている。

「子は幼くして雕蟲を好み、長じて彌篤し。心を釋典に游ばせ、目を詞林に寓し、頃常搜聚して、著述を懷ふ有り」（全梁文、內典碑銘集林序）とみずからを語る元帝について、「梁書」本紀、元帝紀には「既に長じて學を好み博く羣書を總べ、筆を下せば章を成し、言を出せば論を爲す。才辯敏速、一時に冠絕す。（中略）裴子野、劉顯、蕭子雲、張纘、及び當時の才秀と布衣の交りを爲す。著述辭章多く世に行はる」とみえ、江陵の地にも湘東王を頂點とする新たな文壇が形成されていたことをしる。

このような環境に興った梁代文學が、典型的な宮廷サロン文學であり、それがつねに梁朝諸帝諸王の保護奬勵のもとに發足したという否定しがたい事實こそ、梁代文學の性格を規定するものである。かくて宮廷內部にあって、貴族＝官僚たちが自己の才能を詩賦に託して競いみがいたことは、當時爭亂がうち續き、いつ死するともしれぬ生の不安が宮廷貴族たちをとらえ、彼等の享樂主義的生活に一層拍車をかけていた當時の生存狀況と無關係ではありえない。彼等のなかには詩賦にはかない生命の慰めを求め、積極的に人生にはたらきかける意志を喪失した主題を、ただ優美淸麗に展開することを至上とする傾向が助長されていたのである。

この梁代文學について「北史」文苑傳序は「梁の大同の後より、雅道淪歛し、漸く典則に乖き、爭うて新巧を馳す。簡文、湘東其の淫放を啓き、徐陵、庾信路を分ち鑣を揚ぐ。其の意淺にして繁、其の文匿れて彩。詞は輕險、情に哀思多し。格すに延陵の聽を以てすれば、蓋し亡國の音なり」と、痛烈な批判をあびせている。晉宋以來、文學振興の結實を梁代に認める評價を一つの極とすれば、ここにはそれと全く相反する極から、麗美な梁代文學のはらむ脆弱な性格を齒に衣をきせず診斷する評語が存在する。

五

「北史」文苑傳序が大同年間（A・D五三五～五四六）から風雅の道ほろび、しだいに文學が經典から離れていったと指摘する風潮は、東晉以降一應下火になっていた清談論議が、梁の大同年間から再燃しはじめたことに關連している。すなわち、「顏氏家訓」勉學篇には「梁世に洎んで茲の風（清談）復闡く、莊老・周易總て三玄と謂う。武皇、簡文躬自ら講論す。周弘正大猷を奉贊し、化、都邑に行はる。學徒千餘、實に盛美を爲す。元帝江荆の間に在って復愛習する所、學生を召置して親しく教授を爲す。寢を廢し食を忘れ、夜を以て朝に繼ぐ。乃ち倦劇、愁憤するに至って輒ち講を以て自ら釋く」と、當時の清談流行の現象が鋭くとらえられている。三玄の言句から內容の解釋に至るまで、諸帝諸王が好んで講釋をおこなったのだから、上の好むところに從い易いのは下の情で、士大夫の教養には、老莊、易學は不可缺なものとなり、それに反して自然、儒教輕視の風潮が生じたのである。この當時の清談は、嵇康・阮籍在世期にみられた主客任意の討論のなかできたえられる求道精神のきびしさ、或は放達なおおらかさは失われ、諸帝諸王の講釋を拜聽して質疑應答をおこなう程度で、その筵席で自己の才能と教養を開陳して上のおぼえを得るための道具に墮し、風流とはおよそかけはなれた俗氣にあふれている。

この清談の流行にあふられて文學も經學思想を離れ、生きることに對する切實な思索の跡づけのない所謂餘暇の多い貴族たちの形而上學的玩弄の對象であり、別に清談とえらぶところはなかったのである。顏之推が育ち、精神の自己形成をおこなう時期に相遇した梁代の文學的、文化的情況はこのような性格のものであった。「詞情典麗にして西府の稱する所と爲る」「飲酒を好み任縱多く邊幅を修めず」といった「北齊書」顏之推傳の記述をそのときの時代性と照合するとき、個人の意志をこえて、そこにまぎれもなく時代の刻印が發見される。そればかりでなく、彼が「家訓」文章篇ですぐれた詩歌としてとりあげるいずれもが、江南の詩人のそれであり、このことからも、南朝文學の浮薄な性格にたいして、終始批判的な立場をとる彼にして、青年期に受けとめた南朝文學の影響の消しがたさをおしはかることができる。

顏之推の文學觀（文章篇）を南朝江左の聲律を重んじ清綺を尙ぶ文學觀につらねず、北朝の論理的で質朴剛直を尙ぶ文學觀の系譜に位置づけるのは定論である。しかし、このような評價が果してどれほど妥當性をえているかといえば別問題である。「漢魏六朝散文選」の序文をかいた陳中凡氏が歷代の散文を譜分けして、之推の文章論が五經に基本を据ており、南朝の提唱する華麗派の文學觀と背馳するものであるとみて、質朴を尙ぶ北朝の文風につながる擬古派に屬するといっている。なるほど顏之推は「夫れ文章は原と五經に出ず。詔命策檄は書より生ずる者、序述論義は易より生ずる者、歌詠賦頌は詩より生ずる者、祭祀哀誄は禮より生ずる者、書奏箴銘は春秋より生ずる者なり。朝廷の憲章、軍旅の誓誥は仁義を敷顯し、功德を發明し、民を牧い、國を建て、施用多途なり、性靈を陶冶し、從容として諷諫し、其の滋味に入るに至っては亦樂事なり。行い餘力あるときは則ち之を習ふ可し」とのべている点では、原道、宗經篇を構えて儒教の經典を骨格にすえることを主張する「文心雕龍」の劉勰よりも、古典的傳統主義―倫理性と効用主義に力點をおく儒教文學觀の上に、彼の文學觀が立脚していることを證明するものである。だが、このことがそのまま頑固な儒教的道德性を重んじる北朝文學觀の代表的存在であるとみるのは早計である。

その理由は既に鈴木虎雄氏が「支那詩論史」第五章北朝の文學論の項で顏之推の文學觀に觸れて「詩に就いて彼は王籍の入若耶溪詩の蟬噪林逾靜。鳥鳴山更幽。の句が江南に愛誦せられしことを記し、又籍が嘗て詩を論じ『詩經』の蕭蕭馬鳴。悠悠旆旌。に毛傳が言ㇾ不ニ喧嘩一也といへるを情致ある解なりと爲せることを述べ、籍の詩句は『詩經』毛傳の意より生ぜることを言へり。又蕭慤の美容露下落、楊柳月中疏の詩句を錄し、時人未ニ之賞一也。吾愛ニ其蕭散、宛然在ㇾ目。といへり。並に極めて詩趣に通曉せる言なり」という指摘をみれば充分である。

北朝の學者文人が詩の情趣に無理解であることを嘆じる顏之推が、詩の情趣を解析するさいにみせる鋭い詩的感受性は、儒教の拘束を絶って、美意識の追求に力をこめた南朝耽美派の洗練された詩的感覺の洗禮を、二十四歳を境として北へ移った彼がもっとも感受性の強い青年期にうけたところからきている。

詩の情趣を汲みきれない北朝の文人として、具體的に「顏氏家訓」の詩論では、魏收、盧思道、盧詢の名をあげているが、顏之推の文學觀を蕭梁（南朝）文學の發展的路線の上にあるものとみる朱東潤は魏收、盧詢を之推がうとんじていること、また北方の儒者が群書に涉らず、經書、緯書の外は義疏だけを學んでいる點を之推がそしっていることをあげ、このように北方の文人學者と伍することを樂しまない顏之推を北方文學觀の代表者とみなすことは、あやまりではないかとのべている。中國文學批評史の理論化にあたって、おおかたの學者が顏之推を北朝文學觀の代辯者としてとらえようとするなかで、獨り朱東潤のみが彼の文學觀を南朝文學論の系譜のなかに位置づけようとしているのは興味深い（中國文學批評史大綱）。しかし、だからといって、彼の文學觀が輕薄な南朝貴族の生活と對極にある北朝風の現實主義的生活觀にほぼちかい生き方にささえられていることを考えれば、朱氏のように「北朝と固より涉るなし」と言いきってしまうことはできないのではないか。

さらに清の郝懿行はすでに、「顏氏家訓」書證篇の「文章著述の若きは猶微かに相い影響する者を擇びて之を行う。官曹の文章世間の尺牘は俗に違はざることを幸う」のことばをひき、「曬書堂筆錄」卷五のなかで「此れ眞に通人の論なり」とほめちぎっている。生涯著述ひとすじに生き、學問と文章の練達に心魂を傾注した郝懿行の苦勞人らしい實感がこめられた言葉だけに、顏之推の文章觀をみるばあい充分注意をひくものがある。この書證篇の意味を、重複をいとわず推衍するとき、簡潔で常識的な傳達性を必要とする書簡體、いいかえるならば、實際的な効用性をもつ處世技術の文體と、微妙に影響しあうものをみのがすことなく描き傳えることで、はじめて現實の複雜さに對應することができる構造をもちうる文體とを、截然と區別せねばならぬとするものである。かかる顏之推の文章制作觀からも歸納される彼の文學原理は、けっして古色蒼然たる擬古派のそれでなく、あくまで北方風の質朴剛直なモラルと、儒學者らしく徹底した現世効用主義を基幹としていながらも、情感の世界においてはみずみずしい人間性と豐かな美意識を保有することをゆるがせにしない、きびしい文學の原理を要求したのである。

六

顏之推は歳十二のとき、湘東王繹（元帝）の門徒となって、清談を好んだ繹が自らおこなう老莊易學の講釋をうけていることは既に觸れ

た。しかし彼は生來莊老の虚談を好まず、門徒を辭退して家に還り春秋左氏傳及び周禮の學問に精勵する。先に引用した「顏氏家訓」勉學篇で江陵に於ける清談にふれた章句につづいて「吾時に頗る末筵に預り親しく音指を承くも、性既に頑魯亦好まざる所」と告白しているが、これは北齊書の史傳と照應する部分である。清談雅論にふけり、形而上學的な玄理の解析に熱中する風潮に背をむけ、面白いことに「頑魯」という個人的性格を中樞にすえることによって、幽遠雅致な清談論議にたいして、かたくなに自己を拮抗させたところに、顏之推の個性が鮮かにうきでている。

彼が老莊の虚談を捨てて左氏、周官の學問に歸ったことは、左氏、周官が顏氏の家學であるからには、當然の歸趨であるが、このことは流行に侵されやすい軟弱な徒で彼がなかったことを示すと共に、彼の文學觀を考える場合、頗る重要な鍵である。春秋左氏傳、周禮を家學とする顏氏先代の文章について、彼が「吾が家の世の文章甚だ典正にして、流俗に從はずと爲す。梁の孝元藩邸に在り、時に西府新文を撰ぶも、史記（宋本作紀）に一篇の錄せられる者無し。亦世に偶せず、鄭衛の音無きを以ての故なり。詩賦銘誄書表啓疏二十卷有り。兄弟始め草土に在りて並びに未だ編次せられることを得ず。便ち火に遇て盪盡し、竟に世に傳はらず。酷を銜み恨を茹ひ、心髓に徹す。操行は梁史の文士傳及び孝元の懷舊志に見ゆ」と誌るしているのは、顏氏の文章が淫靡にながれない典正さを保っていたため、世間流俗にうけいれられなかったことを誇りとなし、正當な評價を下さなかった輕薄な時代の文學的風潮を暗に諷するものである。

彼が「家訓」勉學篇で「梁朝全盛の時、貴遊の子弟多く學術無し。諺に車に上りて落ちざれば則ち著作、體中何如んなれば則ち秘書と言うに至る。衣に燻し面を剃り粉を傅け朱を施し、長簷の車に駕し、高齒の屐を跟み、碁子の方罅に坐し、班絲の隱囊に憑り、器玩を左右に列べ、從容として出入し、望めば神仙の若くならざる無し」と、梁朝貴族の子弟たちの風俗を支配する空疏であくどい形式美への頽廢した精神的傾斜は彼の言う「流俗」の關心事であり、それはきびしい倫理を自己の生活に課した顏氏の家系に脈膊つ「操行」とあいいれぬものであった。

顏之推が顏氏の文章の典正にふれて家系の操行については、梁史及び懷舊志に見ゆると附け加えていることは理由のないことではない。なぜなら、彼は文章をささえる精神が典正であること、言いかえるならば倫理性の高い精神だけがよく造形しうるものが、典正な文章であることを主張したかったからである。つまり梁の武帝が齊の王位を奪ったとき、齊の恩義に感じて發憤飢死のかたちで節義を守り、武帝に抗議をおこなった祖父顏見遠の凛然たる氣骨。頻繁に梁朝建康の宮廷から招徵をうけながら、ただ自分一個の榮進のために、死を賭して見遠が表現した抵抗を、無意義に終らせまいとして、湘東王江陵藩府から一生離れなかった父顏協の潔癖な執念の持續――ここにみられる顏氏の家系に流れる誇り高き操行に顯在化される高度な倫理性こそ顏之推が考えていた典正な文章の質である。彼の文學觀乃至文章論に一貫する基本的な姿勢を抽象的に規定するものが、この典正な詩文への希求であったといえる。即ち文學において典正な內容をもつこと、文章において典正な文體を保つことである。

「顏氏家訓」序致篇で「魏晉以來、著す所の諸子、理重なり事複し、遍に相い模擬す。猶屋の下に屋を架し牀の上に牀を施すがごとし」とのべる非現實的な虚飾の文體に代るものこそ、彼の求める典正な文學

の體裁であらねばならなかった。彼はこの視點に立って、魏晋以降の著述におおむね認められる論理のための論理性、修辭のための修辭學、複雜な論理も美麗な修辭も、認識すべき對象の本質とかかわりなく枝葉末節の技巧にながれてゆく傾向をするどく批判することができたのである。

唯ここであらためて留意したいのは、彼が顏氏の傳統的文章所産を踏まえて、梁朝宮廷を中心に開花した淫靡なサロン文學の氣風とおよそ對蹠的な文學觀にたち、自らの文學を求めていったことと、その文學形成の出發が自己をとりまく時代の文學情況への否定の精神に立脚していたことである。

七

顏之推の文學觀を、倫理的臭味の強い北朝文學論の系譜に位置づける論者は、その論據として「家訓」文章篇涉務篇にみられる文人輕薄論（文德論）或いは文學者非効用說をあげている。たとえば、陳中凡氏が「顏之推は家訓を著し、形式の模倣を主張しないが、其の論文の要旨は五經に原出し、經文に明練していることにあり、屈原、宋玉、東方朔、司馬相如から謝朓らに至るまで、輕薄な文人となして排斥するのは、南朝の提唱する華綺派の文學と背馳する。すなわち擬古派に屬している。」（漢魏六朝散文選序）とのべ、羅根澤氏が「まさしく文人の行爲について指摘したものは、顏之推と楊遵彥である。魏書文苑傳に〝楊遵彥は文德論を作り、以て古今の辭人皆才を負ひ、行を遺れ、澆薄險忌、惟邢子才、王元美、溫子昇のみ彬彬たる德素有りと爲す〟と言う。旗幟は鮮明に文德を提唱し、文人の行い無きを排斥している。惜むらくは其の文は已に散佚している。そうでなければ顏之推にくらべてさらにきびしい論調であったかもしれない。現在觀ることができる文獻についていえば、當然顏之推の言論が最も詳明鄭重であるとみなさなければならぬ。顏之推は楊遵彥とおなじく北朝にいでており、この論調も北朝の特產であることがはっきりわかる」（中國文學批評史(一)）というのがそれである。

陳中凡氏の所謂文人輕薄論とは、顏之推が「古より文人多く輕薄に陷る。屈原は才を露し己を揚げ、君の過を顯暴す。（中略）曹植は悖慢にして法を犯す。（中略）凡そ此の諸人皆その翹秀なる者なり。（中略）其の積む所の文章の體を原ぬるに、興會を標擧し、性靈を發引し、人をして矜伐せしむ。故に持操を忽せにし、進取に果なり。今世の文人、此の患いよいよ切なり。一事愜當し、一句清巧なれば、神九霄を厲ぎ、志千載を凌ぎ、自吟自賞して更に傍人有るを覺えず」（家訓・文章篇）と論じ、屈原にはじまり、秀れた才能をもちながら輕薄な行爲のために慘敗した歷代の文人の事蹟に集約的な表現をあたえ、それを列擧した箇所を指すものである。

顏之推の文人輕薄論が曹丕、韋誕のそれと異なり、文人輕薄の事蹟の列擧それ自體で完結することなく、文體改革への展望を示唆していることは注目に値いする。それであるのに彼の文人輕薄論をとりだし、北朝文學論特有の倫理性を强調し、きわだたせる一般論まで還元する操作をおこなう論者であって、この有機的な關連性――文學者の生活意識行動とその文體との交涉を、安易にみすごしているのは腑におちない。

顏之推は文人たちが倨傲な誇りをいだき、操をゆるがせにし、いきおい彼等を「進取」にむかわせる素因は、「興會を標擧し性靈を發引する」ことに意を用いる彼等の文體にあるとみている。つまりこのこ

とは逆の關係も亦成立する。文學者の生活の意識と行動がその文體を規制し、その文體が文學者の生活の意識と行動に働きかける相互作用に、彼は自己の文學に對する認識の視點をすえたのである。

いつの時代にも「興會を標擧し、性靈を發引し」た文體は、つねに時代に先行する新たな意匠――「進取」に身をまかせる。それは過去の歷史的時間を貫ぬく文體の宿命であり、さらに一段と切實に顏之推が當面した六朝末期の文學情況が有する病患でもあった。當時梁の元帝が「餘の知己なり」と稱した裴子野が、その「雕蟲論」のなかで「淫文典を破り、裴爾として功をなす。（中略）其の興浮にして、その志弱し。巧にして要ならず、隱にして深ならず」（文苑英華卷七百四十二）という南朝華麗派の文學にあびせたするどい批判と照應してみても、つねに新らしい意匠と樣式を要求する文體の宿命がその宿命ゆえに抹殺してきたものは、文學作品に永遠の生命を賦與する文學者の詩であり志であったことが理解される。顏之推がここでも强調している「持操」とは、文學者の有する志の謂である。輕薄な生活で身に損敗と禍患をまねくことは、志の持續を中途で放棄した「精神の挫折」を意味する。

亂世流離の間に身を處した彼は、屈折に屈折を重ねながら生きぬいた極北に、「顏氏家訓」という稀有の精神所產をきづくことができたのである。梁朝滅亡の際、あえて殉死せずに妻子とともに異朝の奴隷となり、生涯その恥辱に自己をさいなみ、自分の選んだ道をきびしい倫理で檢證しつづけた之推。北に移って漢民族を支配する異民族の宮廷にあって、適材有能な官吏として存在する以外に表面的には一切關心をはらわず、保身養生に心掛け、生きることにひたすらであったかにみえる之推。このように彼のたどった複雜で曲折にみちた生の軌跡をたどるとき、あるときは失われたかにみえる志の持續は、はからずも「顏氏家訓」という著述のなかで見事な結晶をみせたのである。

つぎの挿話には、つねに複雜な軌跡を描いて動く處生の表相では、感情の波紋さえみられないが、それだけに心理の位層においていっそうはげしく交錯する直線的な意志――主体の行動を決定する精神の中核について語られていて興味ぶかい。「齊朝に一士大夫有り。嘗って吾に謂ひて曰く。我に一兒有り。年已に十七。頗る書疏に曉る。其れに鮮卑語及び琵琶を彈くことを敎え、稍通解せんと欲す。此を以て公卿に伏事せば寵愛せられざる無けん、亦要事なりと。吾時に俛して答えず。異なるかな此の人の子に敎ふること。若し此の業に由りて自ら卿相を致すも、亦汝が曹の之を爲すことを願はず」（家訓・敎子篇）。北齊の宮廷において寵愛をうるために子供に鮮卑語と琵琶を敎えているという漢族一士大夫の僞らざる告白にたいして、それを拒否する顏之推のはげしい心の動きが示されている。しかしそのときは、この士大夫に彼は俛して答えない態度をとったにすぎない。これは、はげしい拒否の心理が幾重にも屈折してでてきた態度である。直接に怒りと侮辱をなげつけることが許されぬ狀況に耐えることで、顏之推の精神はしだいに强靱に鍛練されていたのである。

この顏之推が文人輕薄の例をあげて、その文人たちが饒秀な才能の持主であることを認める前提にたって、文學者の生活意識行動とその文體との相互作用に言及したのは、興會と性靈の表現が文體の本質的な課題につながるものの、そのことにとらわれて多くの文人が實生活の途上で蹉跌したため、作品創造の上で充分な開花をみせなかったことをおしみ、「持操」をゆるがせにしない文体の改革を要求したかったからである。つまり生活の意識行動に相關する文體の基本原則とし

て、幾多の風霜に枯れることのない持操（志の持續）――「詩は志を詠う」という中國古來の詩心を彼が再確認したためである。これは必ずしも北朝風の文學觀の特產ではなく、自分の生活體驗がきづいた哲學であり、彼獨自の發想にいでたものであったといえる。ただ「今世の文士此の患いいよいよ切なり、一事愜當し一句清巧なれば、神九霄を厲ぎ志千載を凌ぐ。自吟自賞して傍に人有るを覺えず」という條りは、顏之推より先んじた鍾嶸が「詩品」の序で「今の士俗斯の風（吟詠）熾なり。纔かに能く衣に勝へ、甫じめて小學に就けば、必ず甘心して馳騖す。是において庸音雜體人各容を爲す。便ち膏腴の子弟に至りては文の逮ばざるを耻じ、終朝點綴し、分夜呻吟す。獨り觀て警策と謂うも、衆觀終に平鈍に淪む」という南朝貴族の文飾に雕蟲呻吟する樣子を諷している箇所と照應するところである。

「顏氏家訓」涉務篇に「吾、世中の文學の士を見るに、古今を品藻すること諸を掌に指すが若し、試用有るに及びて多く堪る所無し。承平の世に居りて、喪亂の禍有ることを知らず。廟堂の下に處りて、戰陣の急有るを知らず。俸祿の資を保って耕稼の苦有るを知らず。吏民の上に肆して勞役の勤有るを知らず。故に以て世に應じ、務めを經むべきこと難し」とあり、これが羅根澤氏の所謂文人行う無きの說（文學者非効用說）の論據となっている。顏之推は數度にわたる喪亂戰陣の中をかいくぐり、妻子を抱えて生きねばならなかっただけに、生きることに無用なものは容赦なく破棄せねばならなかった。偶然の運命にたすけられてではあったが、時折の朝廷に諂と順應の奴隷的處生手段によってではなく、自ら身につけた才能と學問を認められ、それを適宜存分に活用することによって生かされ、生きてきたのである。このような彼が自分の胸底からしだいに南朝の耽美的で「迂誕浮華」な氣風をぬぐい去り、南朝文人たちの空疏な「吟嘯談讌」の風習も、實事に迂遠なものである以上、笑うべき軟弱な遊戲として彼が斥けるのも當然であったといわねばならぬ。そして彼のなかには荒い生活の波浪のなかで碎けることのない眞の學問、技術を身につけた人間にたいする合理主義的な確信が靜かにゆるぎなく育っていったと考えるのが妥當である。顏之推の「但學士となれば、自ら人と爲るに足る。必ず天才に乏しければ、强いて筆を操ること勿れ」（家訓・文章篇）というストイックな文章觀もここからでてくるものである。

八

これまで顏之推がその青年期に相遇した梁朝文學の性格、及びそれとの交涉から汲みとられた彼の豐かな詩的感覺と洗練された美意識、顏氏の家系の操行とその文學所產を踏えた典正な文學の希求、文人輕薄論に附加されている彼獨自の生活觀の上にたった文體改革への示唆について觸れ、その過程で顏之推が北方に生活の根據をおいていたがために、彼の文學觀を北朝文學論の系譜に位置づけることは必ずしも妥當でない事を立證してきた。

この章では以上の立論を集約する意味において、顏之推の文學觀の骨子と、それからでてくる具體的な文體改革のプログラムをみてみたい。

顏之推は「顏氏家訓」文章篇で謂う。北齊の時代に席毗という清幹な士がいて行臺尙書にまでなった。席毗は文學を輕蔑して、時の詩人劉逖にむかって、君たちの文章はたとえてみれば開いた花みたいなもので、束の間の慰みにすぎないし、秀れた才能とは言えない。それでどうしてわれわれと一緖にすることができよう、あの千丈の松の樹は常

に風霜にさらされても凋落することはない、と嘲った。これに對して劉逖は、すでに冬に凋まぬ木であって、そのうえ春の花を咲かせるのであればどうですか、とこたえたと謂う。この挿話のなかで、席毗は當時の北朝における文人、學者の文學にたいする姿勢の公約數的な典型とみなすことができるし、風霜にさらされて鍛えられる魂がみずから鎖しがちな情感の世界にあっても、いつそう豐かでみずみずしい開花をみせることを願う劉逖の立場は、顏之推の文學にたいする立場でもあった。つまりこの挿話のなかでつかわれた「寒木春華」の語に彼の文學觀の骨子が象徵的に表現化されている。

具體的な文體改革のプログラムについて顏之推は、「文章は當に理致を以て心腎と爲し、氣調を筋骨と爲し、事義を皮膚と爲し、華麗を冠冕と爲すべし。今の世、相承けて末に趨り本を棄て、率ね浮艶多し。辭と理と競うて辭勝りて理伏す。事と才と爭うて事繁にして才損はる。放逸なる者は流宕して歸るを忘れ、穿鑿なる者は補綴して足らず、時俗此くの如し。安んぞ能く獨り違はん。但務めて泰を去り甚を去るのみ。必ず盛才重譽有りて、體裁を改革する者は實に吾が希ふ所なり」（顏氏家訓・文章篇）とのべ、南朝ではもちろんのこと、南朝の氣風に染まった北朝に於て行われていた、いたずらに典故と辭藻を重んじ枝葉末節にこだわる時俗の浮艶な文體を改革し、思想內容に力點をおくことを希求している。これは劉勰が「文心雕龍」風骨篇で「若し體采圓かならず、風辭練られず、舊規を跨略し、新巧を馳騖すれば、巧意を獲ると雖も、危敗多し、豈空しく奇辭を結び、紕繆を經と成さんや」と暗に梁代の詩文を譏り、先ずもって詩文に淸峻な風骨の確立を要請した批評的視點を繼承するものである。だが「文章は理致を以て心腎と爲し、氣調を筋骨となし、事義を皮膚となし、華麗を冠冕となすべし」という文體論の展開は、劉勰の晦澁な形而上的風骨論よりも、簡にして要を得た明確な論理の冴えをうかがうことができる。

さらに顏之推の文體改造の希求は、「古人の文は宏材逸氣、體度風格、今を去ること實に遠し。但だ緝綴疎朴未だ密緻爲らざるのみ。今世の音律諧靡ひ、章句偶對し、諱避精詳なること往昔に賢ること多し。宜しく古の製裁を以て本と爲し、今の辭調を末と爲すべく、並に須く兩ながら存して偏棄すべからざるなり」（顏氏家訓・文章篇）と具體的な展開をみせる。「古之製裁」とはおおむね先秦兩漢の文章を、「今之辭調」とは魏晉より南朝に極まる文章を指しているものと考えられるが、いま、「顏氏家訓」そのものの文章文體に留意するとき、南北朝末期の華靡艶麗な駢驪體の表現に凝る文章風氣とは別の風格に立ち、淸暢で素朴な文體を樹立しており、これは顏之推が平生主張した文體改革の具體的實踐であったと考えられる。すなわち、駢文のすぐれた詩的表現法と尺牘文のような乾いた散文を並用する「家訓」の文體は、東晉以降の作家中、王羲之、陶淵明、范曄、楊衒之、酈道元らの力强く詩的な彈力性にとむ散文系列に屬するものとみなされる所以である。[6]

ただ、この文體改革のプログラムのなかで留意せねばならぬことは、先に梁の鍾嶸が沈約にたいする私怨にとらわれ、「詩品」序論で皮相な反聲律說をいらだたしくたたき出した態度と對照的に、之推は時流の唯中に立ち「時俗此くの如し、安ぞ能く獨り違はん」と時俗に異をとなえる自己をおさえながら、時流の本質と動向を冷靜に把握している。古人の文をささえた宏材逸氣、體度風格の再生を期し、一方では「顏氏家訓」に散見する聲律、音韻論を例證に引くまでもなく、音律と對偶の嚴密化に正當な評價を下している點からみれば、顏之推

の文學觀は、魂の典正さと美意識において、均衡と調和の文學をもたらした盛唐の詩人たちの豐饒な文學創造において、實を結んだといえよう。⑦（完）

① 周作人は、隨筆「夜讀抄」のなかで顏氏家訓にふれ、之推を兼好法師に比肩し、人情味と叡知にあふれた人生の書であると說く。盧文弨「顏氏家訓」序の「委曲近情、纖悉周備、立身之要、處生之宜、爲學之方、蓋莫善於是書」の批評を參照。

② 佐藤一郎氏は、顏氏家訓小論（東京支那學報第一號）で、顏氏家訓の「夫婦から父子へ、父子から兄弟への論理は決して古代的な正統的家の觀念ではない。小家族を認めるものであり、ここで表現されるものは父子より夫婦を基本とするもの、卽ち家父長制の變改である」とのべ、その背景に北魏に於て均田制が施行されて以後の納稅制變改の過度的時代をすえ、他方之推の佛敎徒としての輪廻思想が個人を家から解放させたとみている。

③ 梁滅亡後、西魏（周）の捕囚となつた之推は周の大將軍李穆によつて重用されている。「爲周軍所破。大將軍李穆慶重之（之推）、薦往弘農、令掌其兄平陽王慶遠書翰」（北齊書顏之推傳）

④ 觀我生賦の制作年代について周作人は「予一生而三化」の句から梁、北齊、北周と三度にわたる亡國を指すと考え、觀我生賦を隋に入る二、三年前の作とみているが（夜讀抄）必ずしもこの說が確定的だとはいえぬ。

⑤ 顏氏家訓文章篇は、北朝の著名な文人である刑邵、魏收が沈約、任昉を各々賞讃模倣し、朋黨を從えて沈、任の優劣を競つたと記しているが、同內容の記載を北齊書魏收傳にみる。

⑥ 繆鉞の「顏之推的文學評論與作品」（光明日報文學遺產三四八）は、之推とともに、王羲之、陶淵明、范曄、酈道元、楊衒之らの作家の散文を「通篇雖多俳偶之句、但是又常有散行、氣足以擧其詞」と高く評價している。

⑦ 私見では、郭紹虞の「劉勰主張原道而開唐代文壇的風氣、顏之推主張典正而開唐代詩壇的風氣」（中國文學批評史）の意見を妥當と考えるが、之推の文體改革論が韓愈、柳宗元の古文運動において實現されたという繆鉞の見解（前揭論文）には贊成できない。